

第4節 校種間連携，教科等間連携

1 キャリア教育推進のための校種間連携，教科等間連携

キャリア教育は校種間連携に基づいて実施されることが望ましい。校種間連携により，各校種で取り組んできたキャリア教育の取組が充実することになれば，キャリア教育の展開によって，校種間連携が促進されることもしばしばみられる。例えば，小学校と中学校が9年間の連携を進めることにより，児童生徒の中長期的な変化をみることができたり，それを見取るための系統的・継続的なキャリア教育のプログラムづくりが進んだりする。また，キャリア教育の展開を通して教師の交流が促進されることも多い。その結果として，教師や学校組織全体の活性化にもつながることが期待され，それがキャリア教育の取組の充実につながっていく。

中学校において，各教科におけるキャリア教育の取組は，それぞれの単元等の特質に応じた「断片」となる傾向が強いが，教科間を横断的につなぐ機能があれば，それらの学びがより広く深く生徒の内面に生かされるようになる。教科間のつながりは，キャリア教育の年間指導計画により見える化され，それを学校の内外で活用することで，自校のキャリア教育を他校種や家庭・地域に示すことができる。

2 事例で見る「校種間連携，教科等間連携」

《事例1》^{あこ}赤穂市立赤穂中学校

学級活動(3)「もうすぐ中学生」での交流

卒業を前に，小学6年生と中学生がオンラインで交流し，中学生生活を不安なく楽しく迎えられる方法を一緒に考える事例である。

〈事例の特徴〉

- ・中学生生活を不安なく楽しく迎えるための交流を行う際に，兵庫版「キャリア・パスポート」を活用することで，小学生はこれまでの頑張りや不安だった気持ちを想起しながら，質問したいことを考えることができ，中学生は，小学校時代の兵庫版「キャリア・パスポート」を振り返り，今の自分と比較することで，自らの成長を実感することができる。

小学校

- ・各学年で書きためてきた兵庫版「キャリア・パスポート」やキャリアノートを振り返り，中学校での「なりたい自分」をイメージする。
- ・気になることや不安なことを出し合い，解決するために何が必要か考えていく。

中学校

- ・小学校から引き継がれた兵庫版「キャリア・パスポート」やキャリアノートを見返し，自分自身の成長や当時の気持ちを思い出しながら6年生へのアドバイスを考える。



〈更なる充実のポイント〉

- ・小学生の質問に答えるだけでなく、こういった取組でどのように成長できたかなど内面の変化についても答えることで、小学生もより明確な目標をもつことができるようにする。



《事例2》南^{なんだん}あわじ市立南淡中学校

特別活動を要として、社会体験活動や教科等を通じキャリア発達を支援する事例である。

〈事例の特徴〉

- ・社会科の学習と関連付けた事前・事後学習、学級活動(3)における振り返りを通して、社会体験活動の学びを深めることができている。

教科

教科等：社会科 「資源・エネルギーと産業から見た日本」

概要：様々な産業の特徴と課題を知り、自己の良さをいかし、将来どの産業に従事したいかを考える。

授業の流れ：

- ①第1・2・3次産業について整理し、特徴をつかむ。
- ②自分ほどのような産業に従事したいか、自分の良さを生かせる産業は何かその理由も含めて考えをまとめる。
- ③それぞれの考えを交流する。

生徒の感想

「この授業で、自分の良さが明るく、社交性があることだと思いました。だから、お客さんを相手にする第3次産業がいいなと思いました。」

体験活動

「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」

(5日間の社会体験活動)

概要：地域や自然の中での生徒の主体性を尊重した体験を通して、生徒のキャリア発達を支援するとともに、共に生きる心や感謝の心を育み、自律性を高めるなど、「生きる力」の育成を図る。

内容 農林水産体験活動、職場体験活動
文化・芸術創作体験活動
ボランティア・福祉体験活動 等

生徒の感想(幼児教育施設)

「体験してみて働くことの大変さ、自分は小さい頃から多くの人に愛されて大きくなったと感じました。小さい子と手をつないだとき、手がとても小さくて、私は成長したんだなと思いました。」

学級活動(3)

「働くことについて考えよう」

概要：トライやる・ウィークを終えて、キャリアノートを活用しながら感じたこと、学んだことを振り返る。自分は何のために働くのかということに考えを深める。また、周りの生徒と考えを交流することで、新たな気付きにつなげる。

①将来就きたい職業を考えよう

T：将来就きたい職業を考えましょう。

S：「看護師」人の役に立つ仕事をしたいか

S：「スポーツインストラクター」教えて成長が見られるのがうれしいから。

S：「警察官」親の姿を見て憧れたから。

職業を考えるときに、興味・関心の観点に加え、自分の力、特性をいかせるという観点についても考える。

②トライやる・ウィークを通して感じたことを話し合おう

T：働くことについて感じたこと、気付きを書きましょう。

S：自分から関わることで相手と打ち解けられることがわかった。

S：人の役に立っていると感じた。

S：ありがとうと言ってもらえてうれしかった。

トライやる・ウィークで感じたこと、新しく気付いたことをまとめる。

学級活動(3)

③興味のある職業の順位付けをしよう

T：自分はどんな職業に興味がありますか。

S：ものを作る仕事をしたい。

S：人と接したり、奉仕したりする仕事がしたい。

S：歴史に興味があるので昔の事を調べる仕事がしたい。

さまざまな職業があることに気付かせ、自分はどんな職業に興味・関心があるのかを考えさせる。

④何のために働くのか考えよう

これまでの学習を振り返り、トライやる・ウィークなどで体験したことをもとに考える。自分と社会との結びつきについても考えるようになりながら、意見交流し考えを発表する。

T：何のために働くのでしょうか。

S：自分の家族を養うため。

S：自分ではない自分に出会うため。

S：自分自身や人のためにになりたい。

生徒の感想

「何のために働くのかは、自分の家族を養うため、自分ではない自分に出会うために働くのだと思います。働くことで他の人や自分が気持ち良く過ごせるようにしたいです。」

教科

教科等：社会科 「調査をすすめよう」
 概要：地元の産業を調べることで、淡路島にはどのような職業や会社があるのかを知る機会とする。

授業の流れ：

- ①淡路島の産業を調べることで、自分たちの地域にある職業の特徴に気付かせる。
 ※地域の方による講話を行い、地元産業に直接触れられるようにする。
- ②まとめた PR 新聞を発表し合い、様々な産業を知る。
- ③将来の自分はどのように働きたいかを考える。



〈特徴〉

- ・社会科の学習と関連付けた事前・事後学習、学級活動(3)における振り返りを通して、社会体験活動の学びを深めることができる。

〈更なる改善点〉

- ・社会科だけでなく、総合的な学習の時間をはじめ、教科等横断的に社会や将来を結び付ける学習を行うことで、より自分事として自らの将来について考えることができる。

第5節 中学校における外部人材・関係機関との連携

1 体験活動における外部人材・関係機関との連携の意義

キャリア教育は学校だけが取り組むものではなく、地域や社会との連携によって推進することが求められる。地域・社会連携を促進するには、学校側のニーズを明確に伝え、児童生徒の現状と課題や体験学習の結果としてどのような効果が見られたのかを伝えていくことが必要である。一方で、学校もひとつの地域・社会資源である。学校教育が地域・社会に果たす役割や貢献を再認識し、互恵関係に基づいてキャリア教育を展開していくことが大切である。



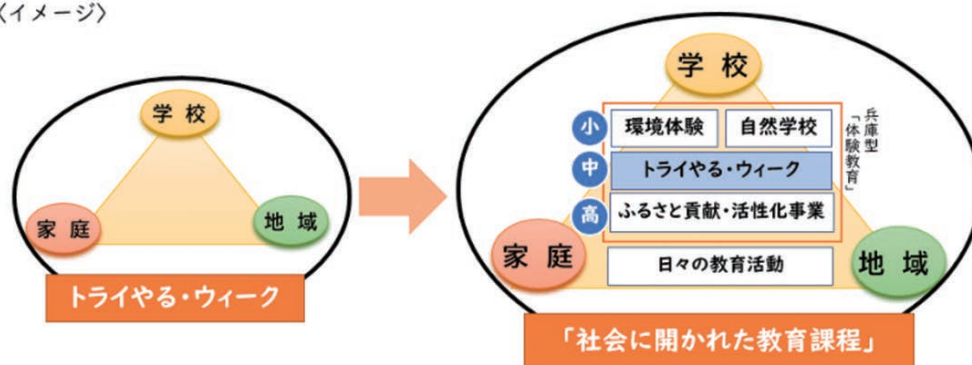
2 事例で見る外部人材・関係機関と連携した体験活動

地域で子供を支える体制の整備(兵庫県教育委員会)

(1)「社会に開かれた教育課程」の考え方による連携の充実

社会に開かれた教育課程の考え方のもと、コミュニティ・スクール等の既存の仕組みを生かしながら、「トライやる・ウィーク」に限らず、普段から学校・家庭・地域が連携する体制を作る。

〈イメージ〉



(2)身に付けさせたい力の共有

「トライやる・ウィーク」校区推進委員会において、各学校の実態に応じた身に付けさせたい力の共有を図る。

- (例)○ 学校・家庭・地域の三者が身に付けさせたい力、生徒が主体的に活動できるための方策等を話し合う場を設定する。
- 地域や保護者に対して、「『トライやる・ウィーク』を通して学びたいこと」等についてアンケートを行う。
 - 事業所に対して子供たちに学びたいこと等を伝える
 - ・ 働くことの「意義」「大切さ」「しんどさ」などを教えてもらいたい
 - ・ 子供たちに考えさせる場面を設けて主体的に活動させてほしい
 - ・ 初日に体験したことを中間日にもう一度取り組める機会を設けて達成感や成長を味わわせてほしい 等

《事例1》丹波篠山市立篠山中学校

コミュニティ・スクールを活用して、学校・家庭・地域がともに子供たちに学びたいことや身に付けさせたい力を考える事例である。

〈事例の特徴〉

- ・ 社会体験活動だけにとどまらず、普段から「生徒に身に付けさせたい力」を地域と共有することで、地域と連携した様々な教育活動において、資質・能力の視点でつながりが生まれる。

(コラム) 職場体験活動の体験先、どのように決めますか？

このコラムでは、職場体験の体験先をどのように決めるかについて、長年、職場体験を受け入れて来られた清川メッキ工業株式会社の専務取締役 清川卓二さんのお話を紹介する。

われわれめっき産業としては、教科書や学校で“めっき”という言葉あまり聞かなくなって長い時間が経過しています。つまり、子供たちは“めっき”という言葉も知らないんです。そういう中で、職場体験で子供たちが来るとしたら、そのほとんどは希望した体験先から外れて来ているわけです。そうなるとわれわれは、せっかく受け入れても、「さあ、働く喜びを今から伝えますよ」などというところからスタートできません。まずはモチベーションを上げるところから始めなくてはいけないのです。職場体験の5日間のうちの半分はやる気にさせる、興味をひかせるところに費やされてしまいます。その結果、仕事の本質を教えるというよりも機嫌を取るといふほうに、重心が移ってしまうのです。この流れでいって、最後はどうか「それなりにおもしろかった」という感想にたどり着くパターンの中企業は結構多いと思うんです。これでは、子供たちは、仕事は自分で選んでするものと受け取ってしまいます。ですが、実際の仕事は、多くの同業他社の中からお客様に選ばれることによって成り立つのです。だからお客から選ばれて初めて仕事ができる。仕事というのはお客様に選んでいただいてやるものという観点が全く抜け落ちているのです。また、小学校、中学校の段階では、職業は子供たちの知らないものがほとんどだと思います。未知の職業を選択するときの心構えも教えなければいけません。学校で子供たちに話をするとき、私は、「仕事を選ぶときは、自分に合わない仕事はやらなくてもいいけれども、知らない仕事はやってみるべきで、それが選択の第一歩」と言っています。だから、「職場体験というのは、未知なる仕事との出会いです。あなたたちが今まで経験したことがない未知なる体験ができます。どんな出会いがあるか、世の中にはどんな職業があるか、近所のどんな人が働いているかというのをワクワクして体験してきなさい」と送り出してもらうだけで、最初のスタート段階がすごく変わってくるんです。

キャリア教育が目指すもの 教室の授業から日常生活へ、将来へつなぐ教育

中学校では、その職業や仕事を暫定的な窓口としながら、実社会の現実に迫ることが中心課題となっている。事前に体験先を決定する際、本人の希望を第一優先とする場合が多いが、学校の定めるねらいによっては、生徒の希望をあえてとらずに体験先を振り分け、体験を通して職業や実社会の現実に対する視野を広げる実践も考えられる。いずれの場合においても、事前の学習を特に充実させることによって、職場体験に対する目的意識を高め、体験先の決定を受入れて前向きな気持ちで取り組めるようにするなど、十分な配慮が必要である。

生徒の希望をとる場合は、体験先が偏る傾向があることから事前の希望の取り方を工夫する必要がある。例えば、事業所名だけで決めるのではなく、その事業所でどのような職場体験ができるのか、具体的な体験内容や、先輩の体験談の提示により、事業所に対する偏見や先入観を生徒に気付かせ、選択肢の幅を広げる工夫が大事である。なおその際には、男女共同参画の視点を踏まえた指導が求められる。

加えて、事前事後の学習において、ゲストティーチャーを招き、実際の仕事について話をしてもらうことで、事前の調べ学習の浅さに気付かせ、もう一度調べてみようという意欲を高めることも有効な方策と考えられる。そのような気付きから、視野が広がったり、思考が深まったりするなどといったことも、事前指導や事後指導の効果の一つであると言える。

第6節 「キャリア・パスポート」の活用とキャリア・カウンセリング

1 「キャリア・パスポート」の活用とキャリア・カウンセリング

学校におけるキャリア・カウンセリングは、発達過程にある一人一人の子供たちが、個人差や特徴を生かして、学校生活における様々な体験を前向きに受け止め、日々の生活で遭遇する課題や問題を積極的・建設的に解決していくことを通して、問題対処の力や態度を発達させ、自立的に生きていけるように支援することを目指すものである。そのためには教師が一人一人の課題をまずしっかりと受け止めて、生徒が安心して自分の悩みを表現したり、質問したりできるような関係を構築する必要がある。「キャリア・パスポート」を活用することで、教師は目の前の中学生が、小学生のときにどのような課題をもち、対処してきたのかを知ることができ、カウンセリングを効果的に進めるために有効である。また、中学生のときのキャリア意識を「キャリア・パスポート」に記しておくことが、その後の進路先における課題の解決につながっていく。このように、学校におけるキャリア・カウンセリングにおいては、「キャリア・パスポート」を活用することが有効である。

2 事例で見る「キャリア・パスポート」の活用とキャリア・カウンセリング

《事例1》世田谷区立富士中学校

時間をつなぐ役割と人と人をつなぐ役割を「キャリア・パスポート」にもたせ、活用した事例である。

〈事例の特徴〉

- ・「キャリア・パスポート」を活用した三者面談と小中が連携したボランティア活動を学校の特色としている。
- ・三者面談を、生徒のキャリア形成のための重要な機会と捉え、「キャリア・パスポート」に、記した前学年・前学期の内容と照らし合わせながら、これからの目標ややりたい自分像を明確にすることを大切にしている。
- ・ボランティア活動では、自分と異なる立場の人と直接関わることを通して、視野を広げたり、貢献の喜びを感じたりできることを目指している。

(1) 時間をつなぐ「キャリア・パスポート」

新年度の始まりから間もない4月中旬から、事例校では保護者を交えた三者面談を実施する。1年生にとっては、入学式から10日と経たない時期の面談である。ここでのポイントは、小学校から引き継がれる「キャリア・パスポート」の中から、小6時のものを利用することである。小学校での最後の1年間を、どのようなことを目指して過ごしてきたのか、また、最上級生としてどのような経験をしてきたのかを、生徒自らが語る。その後、書き上げたばかりの中1時の「キャリア・パスポート」を机の上に置き、この1年間で、どのような成長を目指していきたいのかを、三者で共有していく。



【面談後の感想】

- ・小学校の時よりレベルアップしたいと、本気で思った。(生徒)
- ・小学校と中学校がつながっているよさを実感できた。(保護者)
- ・生徒を知ることから始める貴重な時間になった。(教師)

(2)人と人をつなぐ「キャリア・パスポート」

年間でいくつもあるボランティア活動の中から、11月下旬を目途に行う「小中クリーン作戦」を選ぶ生徒は多い。この日は、始業前に出身小学校に行き、小6児童とグループを作って、学校周辺の清掃活動を行う。どの小学校でも、保護者の参加が見られる。中学生のリードの下、小中学生が協力し合って、地域貢献をしている姿は微笑ましい。参加した生徒は、帰校後に時間を見つけて、「キャリア・パスポート」「体験活動・ボランティア活動で育もう」のシートに、感じたこと・考えたこと・学んだことを記録する。生徒の「キャリア・パスポート」には、「想像以上に人が集まっていて、地域のつながりが感じられた。小学生・中学生・地域の人と、今後も関わりをもちたい。」と書かれたものがあつた。この「キャリア・パスポート」は、2学期末の三者面談の資料となり、ボランティア活動から得た思いを、保護者とも共有する。



〈更なる充実のポイント〉

- ・面談後に感じた自己の成長や今後の課題などについて、学級活動でこれまでや現在の自分をも一度振り返り、自己の興味・関心や適性を把握する活動を通して、主体的な意思決定につなげる。

《事例2》世田谷区立世田谷中学校

運動会と三者面談での「キャリア・パスポート」の活用の事例である。

〈事例の特徴〉

- ・運動会の実施前と運動会当日に目標や成果を「キャリア・パスポート」に記入することで、運動会にかける気持ちを再確認し、次の学びにつなげる意識を高める。
- ・生きた言葉の直接的なコミュニケーションを重視するために、通知表の所見ではなく、「キャリア・パスポート」の記述で三者面談を実施。

(1)「キャリア・パスポート」での運動会の振り返り

学校行事での経験を通じて育つ生徒の力には大きな期待がある。そこで同校は、運動会・学芸発表会・宿泊行事の際に、「キャリア・パスポート」を活用している。

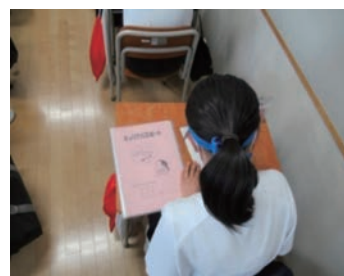
様式を作る際に重視したことは、行事前に、「自分の目標」と「目標達成のためにがんばること」を記入するようにしたことである。生徒が書いた文章を読むと、クラスの一員としての自覚の高まりを感じたり、仲間と協力して楽しいクラスを作りたいと心から願っていたりしていることが、強く伝わって

くる。中には、運動会での自分の係の仕事に触れ、運動会を成功させたいという気持ちを強く表した記述も見られる。

運動会当日は、終了後の学活の時間に行事後の記録を各自が行い、「目標達成のためにがんばったこと」を書き、さらに、「今後生かしていきたいこと」を記していく。後日でなく、余韻が冷めやらない時に思いを書くことを大切にしている。そこからは、勝敗に関係なく、実感した価値や明日からの意欲や自信を感じさせるものもある。視線をずっと先に延ばし、秋の合唱コンクールに向けた決意を述べた「キャリア・パスポート」もあった。

(2) 通知表の所見に替わる「キャリア・パスポート」

事例校は、あるべき教師像の1つに「称える教師」を挙げ、「共感する力が生徒の安心を作る。自己効力感が生徒を伸ばす。」としている。その絶好の機会が、夏休み早々と2学期末に行う三者面談である。この機会にそれまでの「キャリア・パスポート」を机上に広げ、各学期の振り返りと、次の学期の展望を話し合うのである。生徒からは、「親の前で褒めてもらえるのは少し恥ずかしいけれど、嬉しいほうが強い。」という感想が聞かれた。また、「受験のための面談なので、成績の話ばかりだと思っていたけれど、最初に、『1学期の目標が達成できていた。』と言われ、『そうだった。』と思い直した。」という3年生もいた。



これまでの通知表の所見欄は、「キャリア・パスポート」に書いてあることのわずか一部を文章化したもので、内容は面談での話題とほとんど重複する。そこで、文字による伝達から、生きた言葉の直接的なコミュニケーションに切り替え、通知表の担任所見は、三者面談がない3学期のみ書くこととした。このことは、繁忙期である1・2学期末の教師の業務軽減にもつながっている。

〈更なる充実のポイント〉

- ・学級活動において、運動会の経験が各教科等の学習に生きることなど、学校行事と各教科等の深い関わりに気付く機会を設定する。

